

女性にとっての“ふるさと”と定住願望 (3)

武 田 圭 太

問 題

加齢という時間の経過は、人の容貌や内面性ばかりでなく、共に暮らす家族や親しい人たちとの関係性を少しずつ、また、ときには劇的に変容させ、個別の節目を刻印しながらそれぞれの個人史を形成する。一人ひとりの個人的な歴史の複雑な集合体のなかから、一般化し得る法則性を解明しようとする取り組みは、観察者の興味や関心の違いにもとづいて主題別に整理することができる。例えば、人の生涯を連続するいくつかの段階 (stage) に区分して記述・説明する取り組み (Erikson, 1959; Santrock, 1985; 武田, 1993)、個人をとりまく比較的安定した生活環境が変化し、新しい生活環境へと移行 (transition) する動態に注目する取り組み (山本・ワップナー, 1992)、人は生涯をとおして互いに協力し合う人たち (convoys over the life-course) に取り囲まれ生きていくと考え、その構造を明らかにしようとする取り組み (Khan & Antonucci, 1980; Plath, 1980)、生活構造を設計し組み立てる際の選択行動に焦点を合わせた取り組み (Levinson *et al.*, 1978)、過去の対処法では克服し難い困難に直面したとき、保持している個人的な諸資源を有効に活用して解決する過程を明らかにし体系化しようとする取り組み (Schlossberg, 1989)、歴史の変化や出来事を視野に入れ、世代間の関係について家族を対

象に検討する取り組み (Elder, 1974; Hareven & Langenbach, 1978)、価値の社会化 (value socialization) を鍵概念とし、個人の加齢に伴う成熟、個人の社会化に影響をもたらす歴史背景、それに全体社会の変動を加えて構成される概念枠組みを構築しようとする取り組み (Bengtson, 1975) などがある。

人の生涯にわたる変化の全貌を把握したいという思いから、各取り組みは着実に成果をあげてきているが、成人期に関する断片的な情報は大量にあるのに、成人期の本質については、まだほとんど理解されていない (Levinson *et al.*, 1978)。そのうえ、これまでの研究の大半は、暗黙のうちに男性を対象として行われてきた。女性の生涯に関する探究は、男性に比べ少ないのが現状である。

そこで、本稿では、移住という1つの選択行動に着目し、移住に伴う生活環境や人間関係の変化に、移住者がどのように適応しようとしたのかについて、女性の視点から検討する。調査の対象は、都市から山村に移り住むことを選択した女性である。彼女たちが移住先に選んだのは、集落の住人の多くが高齢者で、過疎化に歯止めがかからない中山間地の町である。地元の人が去ってしまい帰って来ない山中の地縁も血縁もない町に、都会に住む人が、なぜ、移住したのかという素朴な疑問から原調査を行った。

夫のふるさとである同じような環境の中山

間地に住む女性たちの生活意識や人間関係を調べたところ、そこでの暮らしには概ね満足しているが、臨死に向かうこれからの老後については、漠然とした不安と諦観が認められた(武田, 2011, 2012)。将来が必ずしも明るいわけではないところを、敢えて新たなふるさととしてIターンする(武田, 2008)という選択行動は、中高年期に特有な生活の問題を反映しているのかもしれない。

方 法

調査対象 田舎暮らしを希望して、都市から山村に移住した2人の女性a、bが調査対象だった。彼女たちの移住先は愛知県北設楽郡T町である。移住前の居住地は、aが名古屋市、bが高槻市である。

愛知県北東部に位置するT町は奥三河にあり、豊川と天竜川支流の源流地域である。そして、町の総面積123.4km²の91%を山林原野が占める中山間地である。昭和30年代(1955~1964年)、林業や製材の拠点として繁栄したT町も、その後、木材価格の低迷によってしだいに衰退し、過疎化に伴う林業従事者の減少や、2011(平成23)年4月1日現在、高齢化率45.5%という人口構成が、田畑や山林の保全を困難にしている。

a、bは、このような山中の集落に自発的に移住してきた。移住時期は、aが2005(平成17)年8月、bが1994(平成6)年4月である。

調査方法 原調査は、移住の動機づけや移住するまでの経緯などを中心に、調査対象者が移住経験をどのように認知しているかについて、できる限り自由に回答してもらおうと構造化されていない面接法で行った。この方法によると、回答者は自身の意見の内容とそれを表明する時間の長さを完全に統制できる。面接時間は、それぞれ約2時間だった。

約2時間の聴き取りは、調査対象者2人が

それぞれ異なる話を展開させて終了したが、共通の話題として、①移住の経緯、②移住の動機づけ、③T町の人間関係、④居場所の確保に言及するよう促した。

調査時期 原調査は、2009(平成21)年6月に行った。

分析手続 本稿では、過疎化と高齢化が進んだ山村へ自発的に移住した女性が、移住後の日常に、自己をどのように位置づけているかについて、彼女たちの証言にもとづいて考えてみたい。そのために、4つの共通する話題別に2人の証言を要約し、その内容を検討してみよう。なお、本稿では、証言のなかで調査対象者を特定し得ると考えられる人名や地名などは省略し記述した。

結果と考察

移住の経緯 aが名古屋市からT町に移住したのは、2005(平成17)年8月、60歳になる年である。aの夫も名古屋市の出身で、夫婦共に小中学校生のときに田舎暮らしを経験し、その原体験を共有している。aは、夏休みに従兄が住む恵那山中腹で過ごし、aの夫は、戦時中の縁故疎開で、山梨県身延の駅から車で30分の山奥に住む叔父の家で生活した。学童期に、都会と違う生活環境で過ごした経験が記憶に強く残り、「いつか田舎で緑に囲まれて暮らしたい」と思うようになったという。

そうした思いから、子育てをする頃、夫婦は名古屋市東方の東郷町に家を構えた。東郷町は、当時、周囲を畑に囲まれ、小さな丘には小川が流れ、山菜が採れる里山が残っている田園風景だった。ところが、子どもが他出する頃、田畑は宅地になり、丘は造成されてマンション等が建ち、家の前の道路は車がひっきりなしに通るようになった。

「ある程度は覚悟していたが、これから今まで以上に人と触れ合い、ゆったりと、のん

びりと老後を暮らしたいと思っていたのに、家の周りは2人が望む環境ではなくなってしまった」。

子育てを終えた後、学童期の原体験を再現した生活環境のなかで、成人後期から老年期を迎えるという夫婦の計画は、根本的に見直さざるを得ないような状況になってしまった。

「さあ、どうする？ 緑に囲まれた生活にするのか。田舎に行くのか、行くならいつか？ 行くなら定住で地に足をつけて暮らしたい。引越しにはエネルギーがいる。体力もいる。今まで築き上げた人間関係はどうするのか？ こうして、思いつくさまざまなことを検討した」。

a が転機を感じたのは、1998 (平成10) 年4月、自動車運転免許を取得し、T町の老人保健施設Y荘を見学するため、同年11月、豊川インターからT町までドライブしたときの道程と、Y荘の駐車場に車を止め、目の前に山々の風景を見た瞬間だという。

「ほっとする、なぜか懐かしい思いをした」。

翌1999 (平成11) 年9月、aの母親がY荘に入所することになり、2002 (平成14) 年12月末に亡くなるまでの間、夫婦はT町を頻繁に訪ねた。2人は、地図で東郷町からT町までを扇形に囲み、その囲んだ地域に実際に外向いて観て体感し、しだいに田舎暮らしを望むようになっていったという。

「名古屋で、伊吹おろしの冷たい寒さで鍛えられている2人は、山間部で四季を感じられるところを(移住先の候補地として)探した。田原や浜松など、静岡方面の季節の穏やかすぎるところは除外した。三河山間部が長野県、または県境の静岡県辺りを、季節や天候に関係なく暇さえあれば、地図に載っている道が舗装されていれば、林道でも車を走らせ、そのつど集落の生活環境などもチェックした。現在の豊田市で、旧小原村、旧旭町、

旧足助町、旧下山村、それに設楽町、旧作手村などは、温暖化とはいっても、冬は道路が凍てつき歩行や車の運転が難しい。T町の中心地区は、昼間は雪などもなく、買物に出かけることができる。寝雪になることは、ほとんどない。このようなことから、子どもたちから(T町に移住することの) 理解を取りつけることができた。(T町は) 住みやすいところだけれど、冬は中心部を除くと大変厳しい」。

2005 (平成17) 年の春頃には、T町への移住を決心し、週に一度はY荘でボランティア活動を続けた。T町をより深く知るためである。現在、T町役場は広報誌などで空き家に関する情報を伝えているが、当時はそうした活動をしていなかった。役場に問い合わせると、空き家はたくさんあるが、貸しても売ってもよいという空き家はごくわずかということだった。

「役場がだめなら当たって砕けろ」と、町内を訪ねて情報を集め、借家や売家を手探りで探した。(家の持主である) T町を離れた子(の親に会ったり)、留守を預かる親戚などを訪ねたりしたが、なかなか(家の持主に) 交渉できなかった。

どこの馬の骨かわからん者とは、話もしたくないという状況で、不動産屋さんでさえ、全く相手にしていただけなかった。そんなとき、貸してもよいと言ってくれる人が現れて、その家を見せていただいた。そこには亡くなられた両親の荷物と、そのお子さんたちの不用品があり、整理してくれたら、貸してもよいとのことだった。しかし、その荷物の多さは、並大抵の量ではなく、また、冬対策を考えると(その家の状態では) 断念せざるを得なかった。こうした経験から、この地域も他の田舎と同じで閉鎖的なのだと感じた」。

a がT町への移住を諦めかけていた2003 (平成15) 年4月、「今度、町が分譲地を売り出すそうよ」という情報を得た。さっそく

T町役場の企画課へ出向いて確認した。そこは、北側の山を背に東側には小川が流れ、スーパー・マーケット、診療所、役場などが徒歩圏内にあり、この位置なら子どもたちも納得し安心してくれると思った。ここを購入できなければT町を諦め、他の地域を当たろうと受付日に臨み、運よく購入権利を得て現在に至っている。

老母を老人保健施設に入所させることが、T町移住の直接のきっかけになったようであるが、aが探し求めていた成人後期から老年期を過ごすのに相応しいところをT町に感じ取ったのは、「豊川インターからT町までドライブしたときの道程と、Y荘の駐車場に車を止め、目の前に山々の風景を見た瞬間」の自己知覚と思われる。その瞬間、aはT町の環境の一部に自己を違和感なく組み込み、自己を含む環境全体のまとまりのよさを知覚したのである。

人間行動を個人のパーソナリティ、環境、そして両者の相互作用の関数とみなす社会心理学の基本方程式(Lewin, 1951)は、個人が全体の部分を構成し、同時に、影響を受ける社会的な場や文脈のなかで人の行動を考えるとということを意味する。このような文脈内存在者(person-in-context)の概念は、個人がその一部となる環境を微視水準から巨視水準までの入れ籠状の構造体と仮定する(Orford, 1992)。また、環境には、社会環境だけでなく自然環境を含めて考える必要があるだろう(山本, 1989)。aは、T町の自然環境に自己を組み込んで無理なく全体の一部になるという経験をし、移住を考えるようになったと思われる。

移住前後では、居住地の地域生活環境と、そこに住む生活主体との相互作用が主題になる。地域生活環境システム⁽¹⁾は、生活諸資源⁽²⁾と生活諸関係の集合体である生活構造に、個人、つまり、生活主体が、生活諸資源を獲得し享受するうえで媒介となる他者、つ

まり、他の主体と結ぶ生活諸関係⁽³⁾を加え構成される(山本, 1989)。生活主体、つまり、個人の生活システムと地域環境システムとの適合性(man-environment fit)を高めるため、あるいは、両者間の不適合度を調整するために、個人が負荷された生活課題に対処する過程を記述することが最初の課題になる。そこで、次にbの事例をみてみよう。

bが高槻市からT町に移住したのは、1994(平成6)年4月、35歳になる年である。bは、名古屋市で生まれ育った。bの夫は、福井県で生まれ大阪で育った。b夫婦がT町に移住したとき、長女は10歳、長男5歳、次男2歳だった。次男は、食物アレルギーで強度のアトピー性皮膚炎だったので、b夫婦は水と空気がきれいな田舎に移り住むことにした。

「田舎暮らしの本を買って、あちこち見学にも行った。一番遠くは、鳥根県隠岐の島だった。海に囲まれた島は、魚好きの主人には最高の環境だったが、乗ってきたフェリーに救急車が乗り込んだのを見て、医療設備のない孤島での生活に不安が過り諦めた」。

新聞や雑誌で情報を収集しているうち、bの母親が、T町で若者定住促進住宅を建設し、入居者を募集していることを伝えた。100坪の土地に新築一戸建てが、毎月の家賃を20年支払えば所有できるという条件だった。bの夫は山仕事を希望していたので、町の90%以上が山林というT町に、Iターン者向けの住宅があるとは願ってもないことだったという。

「空き家があっても都会の者には貸せないとか、住宅確保は移住者にとっての第一関門である。それなのに、町がIターン者に住宅を用意してくれるなんて、田舎の人は閉鎖的と言うけど、町をあげて歓迎してくれる、きっと都会の人にも優しい、開けた町なんだと期待に胸膨らませ、意気揚々と応募した。そして、見事当選し、晴れてT町民となった。

現地を見学して、わずか2ヵ月で移住が決まった」。

子どもの健康を願って田舎に住もうとしたbだったが、住む家を見つけるのは容易ではない。空家はあっても余所者には与えないところが多い。bと同じように、aも住宅を探すのには苦労したようである。

移住の意思決定 aが初めてT町を訪れたときから約3年間、aの母親はY荘で余生を過ごし亡くなった。a夫婦はY荘に母親を訪ねてT町に通ううち、しだいに田舎暮らしを実現する気持ちになっていったようである。

こうしてみると、aがT町に移住しようと決心したのは、そこに老母を預かってくれる施設が見つかったことがきっかけになったと思われる。そうした施設が名古屋市内や周辺地域になかったのか、それとも、田舎暮らしを念頭に、都会を離れて探しているうちにT町に行き着いたのか、実際についてはaから聴き出せなかった。核家族世帯化や単独世帯化が進むなかで、農村高齢者は依然として直系家族中心の人間関係を維持し、それに強く依存している(広田, 2003)が、都市高齢者も同様に家族に頼っている。しかし、母親をY荘に入所させると同時に、a夫婦もT町へ移住する準備に取り掛かったわけではないようなので、Y荘を見つけたことは、T町への移住を意思決定するまでの慎重な検討の始まりだったのだろう。

それから1年間、a夫婦は、移住を前提に家を探し求めた。空家はあるのに借りられない状況にあって、T町役場が分譲地を売り出し、bと同様、それを購入できたので移住が実現した。移住の実現は、住宅の確保が直接の要因になったと考えられる。

一方、bがT町への移住に動機づけられたのは、次男の病気療養が主要因であるが、最終的な移住の意思決定は、日常生活を維持するための基本要件がT町に備わっていることを確認したうえでの結論である。具体的な生

活の基本要件として、bは、①T町のソトに出かけるための公共交通機関、②病院医療施設、③ゴルフ場がないことについて、T町の生活環境を点検した。これらの要件を確かめて、b家族はT町に移住したが、移住前の確認は充分ではなかったようである。

「T町に移住する決め手となったのは、JRの駅があったこと、病院があったこと、ゴルフ場がなかったことである。しかし、いざ住んでみると、電車は1時間に1本で、T駅まで1時間半かかる。停車する駅の多さには閉口した。大阪では、同じ距離を快速電車で半分の時間で行ける。やがて、子どもたちが高校に通うにも、この電車を利用することになったが、毎日片道45分の乗車にうんざりしていたようだった。

もう1つ期待はずれになってしまったのが病院である。移住当初は、国保の総合病院で産婦人科や皮膚科もあったが、規模が縮小され、今では公設民営の病院となっている。特に、お産をするのにH市の病院まで通院しなくてはいけないなんて、これでは少子化に拍車をかけるようなものである。実際、お産ができないからと、町外へ引っ越された方もいる。過疎の町で地域医療の充実を図ることは難しいと思うが、教育と共に医療はなくてはならないものである。これ以上の規模縮小にならないよう願っている」。

T町移住を決心したときの決め手となった生活の基本要件が、実際に住んでみると期待はずれだったことをbは経験した。それでも、b家族は、T町から余所へ再移住しないで住み続けている。期待はずれだった生活環境を補完して余りある他の良好な生活環境を見つけたのか、あるいは、都会では所有し難い広い家や土地を手に入れたことでT町に拘束されてしまったのか、期待はずれだった移住先でbが未だに暮らしていることに帰因する情報は原調査で得られていない。

しかし、移住直後の認知的不協和を解消す

る過程で、bはT町内の人間関係を形成しながら、実際に移住しているという自身の行動を肯定できるような新たな情報を得ることで、移住を正当化するような認知が安定化したのではないかと思われる。そして、移住を肯定的に認知することが、bが自身の居場所を見つけ、そこに全体の部分として自己を存在させようとしている表れなのだろう。

T町の人間関係 T町移住後の生活は、新しい社会環境である隣近所の人たちと交流しながら、地域社会の慣習やしきたりを学習し、構成員として社会化が進む過程である。家を中心にT町内の生活圏が拡大するなかで、地元の人たちと交わる経験についての証言から、T町の社会環境を考えてみよう。

子育てを終え親を亡くした後、「今まで以上に人と触れ合い、ゆったりと、のんびりと老後を暮らしたいと思っていた」aは、T町をはじめ奥三河山間部には結いが残っていると主張した。

「田植え、稲刈り、茶摘みの他、昔は屋根の葺き替えなども（みんなで）していたらしい。ご近所や血縁関係で結いの仲間が構成されていて、1つの作業を結いの仲間全員が、順番に1軒、1軒していく。今、結いは全国的に消えつつあると聞く。機械化で（結いの協働作業が）必要でなくなったところや、（結いの構成員が）高齢のために、お礼のお返し作業が体力的にできなくなって脱会せざるを得ないというのが現状のようである」。

結いのような長年にわたって維持されてきた集落共同体内の人間関係は、長幼の序を基本とするタテの秩序体系を構成している。一方、ほぼ同年代の構成員は、ヨコに繋がって集団を形成し、年齢を基準に割り当てられた役割を遂行する。年長者は、集落共同体の活動や作業を指示し統制する。若年者は、年長者の指示に従って行動する。そのため、同年代のヨコ集団は、子どもの頃からの仲間集団でもあり、互いに気心が知れた親しい関係に

ある。

「若者たちは、大変仲がよい。何事か起きると、みんなが集まり、知恵を出し合い事にあたっている」。

その反面、指示する年代と指示される年代とのタテ関係には、摩擦や緊張が感じられる。

「そんなおとなたちについて、知り合いの若者は、『僕らは人数も減って、一人ひとりの負担が増えて大変だからと改善案を出しても、（おとなに）『いいや、今までどおりにやってもらおう』と言われて、いろいろな場面でおとなに阻止されるんよ。まあ後10年したらおとなもいなくなるんで、それまで待つわね』と諦めている」。

ここで、「おとな」とは、80歳代ぐらいの高齢者を指し、「みんなの上に位置づけられ、権力がある」という。

例えば、葬儀の場合、組（隣組）が手順や方法など、葬儀全般の運営を担当し進行するが、実際にはおとなの指示で執り行われる。仮に、若い喪主が間違えて先走ったことをすると、組の若者が、おとなと若い喪主との関係修復に努め、本来の手順に戻す。そうしたことの煩わしさもあってか、最近では、自宅ではなく会場を借りて葬儀屋に全て任せる人が増えているという。

「多くの遺族が、S市やT市など、他地域の住人なので、その会場を利用するようになった。また、亡くなられたときの役所への手続きは組の方をお願いし、葬儀そのものは葬儀屋に依頼している。そうすることで、おとなとのあつれきや摩擦を最小限にし、不満も解消できるという若者の知恵かもしれない」。

集落共同体の主要な協働作業の1つである葬儀を、従来の型どおりに執行しようと若年者に指示する高齢者に対して、葬儀の執行者と葬儀の場を集落のソトに外注し、死亡届などの必要な手続きは、これまで同様、組に任

せるという対応で調和を図ろうとする若年者の工夫が興味深い。高齢者の勢力 (power) は、集落共同体内の慣習やしきたりなどを熟知し経験も豊富であることが源泉と思われる。彼らの知識や経験の大半は、集落共同体に継承されてきた思考や思考の定式化された型に関する情報である。一方、若年者は、高齢者がよく知っている思考や行動の型を遂行することによって得られる結果と同じくらいの成果を、別の仕方では達成するための情報を持っている。それは、集落共同体のソトにある思考や行動に関する情報である。

葬儀を執り行うことの結果や成果だけを考えるなら、集落共同体内の思考や行動でもソトのそれでも大差ないかもしれない。しかし、集落共同体の凝集性を一定水準で維持し、まとまりを保つには、共有されてきた思考や行動の型を無視するわけにはいかないだろう。T町では、現在、葬儀の執行に関する新しい思考や行動の型が定式化されつつあるのかもしれない。それが集落共同体の構成員の規範となり、常識となるかについては、まだしばらく経過を観察しなければならないだろう。

夫婦で移住した a に対して、3人の子どもがいっしょに移り住んだ b 家族の場合、子どもの学校生活をとおしてT町の間人関係を知ることができる。長女は、小学校5年生の新学期からT町の小学校に転校した。生徒数が極端に少なくなったので、学校の友だちや教師との関係が濃密になったようである。

「それまで全校児童800人の学校から50人の学校への転校は、ちょっとしたカルチャー・ショックだったと思う。クラスメイトは11人。授業はマン・ツー・マンみたいなもので、落ちこぼれの心配がなくて喜んでいたので、親だけで、人数が少ないので授業中に当てられる回数が多くて大変だと娘はこぼしていた」。

長女は、田舎暮らしを嫌っていたという。

都会の便利な生活に慣れているので、「マンガを買うのにも苦労する (田舎の) 生活が嫌で、早くT町から脱出したいと言っていた」。

実際、長女は高校卒業と同時に、都会で一人暮らしを始めた。8年間、T町で暮らして都会生活に戻った長女は、重度のアトピー性皮膚炎になってしまったり、空き巣に入られたり、車上荒らしに合ったりと、「一人暮らしをして、都会の怖さもいろいろ経験しているが、娘はずっと都会で暮らしている。田舎の退屈な生活より、刺激的な (都会の) 生活が魅力的なのかもしれない。T町では、ちょっと見慣れぬ車が部落に入って来るだけで、警戒し、いい意味でのムラ意識が発揮されている。若い人はそれを息苦しいと感じることもあるのだろうが、いつか、『やっぱり、T町がいい』と言って娘は帰って来てくれるのではないかと密かに願っている」。

限られた少数の人たちとの関係によって、日常生活が同じように繰り返される安心と安全は、生活の行動範囲を広げようとする社会化の段階にいる青年にとっては、退屈で窮屈な環境に思えるだろう。ふるさとの心象が形成された時期として、多くの人が回顧するのは、小学校を卒業するまでの個人的な時間である (武田, 2008)。小学校5年生のとき移住した長女が、T町をふるさととして心象化するかについては、微妙な臨界性を含むと思われる。

「息子たちは5歳と2歳だったため、それほど田舎の生活を嫌がることもなく、T町っ子として育っていった。美味しい水と空気のおかげで、下の息子のアトピーはみるみる治っていった。頬ずりすることすらためらったほっぺたもすべすべになり、薬でむくんでいた顔もすっきりとなって、T町に移住した目的を達成でき、思い切って田舎暮らしを始めると本当によかったと思った」。

次男の病気を治すことが移住の最大の目的だったが、その恩恵を受けたのはむしろ長男

だったかもしれないという。T町に引っ越す1年前、長男は通っていた幼稚園になじめなかった。T町には保育園しかないので、働いていないbの長男は、小学校に入学するまでの1年間を自宅で過ごした。移住した翌年の4月に、同級生9人で入学式を迎えた。

「(長男は)食が細く、好き嫌いが多くてあまり食べない。かけっこも遅く、逆上がりもできないので、みんなについていけるか心配だった。案の定、まずつまずいたのが給食。一人最後まで残っても食べられず、苦痛の時間となっていた。すると、担任の先生が『好きなものは何ですか？ 少しでも給食が楽しくなるように、好きなメニューにします』と言ってくれるではないか。都会の学校では考えられないこと。次男も、アレルギーのため卵が食べられないことから、卵料理の日は、次男だけ特別に別のメニューにしてくれた。こういったきめ細かい対応ができるのも、小規模校だからこそと思う。クラスメイトが10人前後で、勉強面、生活面に十分な配慮ができ、子どもの個性を伸ばすことができるのは田舎の学校のよさだと思う。都会にいたら、長男は、きつといじめられっ子になっていただろう」。

少人数の生徒一人ひとりに時間をかけて教育指導できる学校の環境下で、長男は、苦手だった運動も得意になり、音楽の才能を伸ばすことができたbは思っている。

「昨年、一浪の末、(長男は)希望する大学で大好きな音楽の勉強ができることになった。そこにたどり着くまで、いろんな人の励ましがあって、泣きべそでわがままな息子が、親の仕送りは一切なし、バイトで生活費を稼ぐというたくましい子に育った。これも田舎暮らしの賜物だと思っている」。

移居前、専業主婦だったbは、家計を補助するため移住後は働くようになった。bの仕事は、生協の配達とCAクラブの事務局である。配達の仕事は、週2日で10年以上続け

ている。

「老人世帯などに食材を配達しているが、畑の新鮮な野菜をいただいたり、地域のことを教えてもらったりと、地元の人とのコミュニケーションができて、Iターンで来た私にとっては、なかなか有意義な仕事である」。

CAクラブ事務局の仕事は5年目で、bは4代目の事務局長である。こちらは仕事があるときだけ出向けばよく、自由勤務だし事務局はbだけなので、気楽に働けるという。bがこの仕事をするようになったのは、Iターン者としてT町役場に出入りしていたことがきっかけだった。

「移住した当初は、町づくりの企画などの会議に参加を要請され、よく出かけた。ずっとT町で暮らしている人には当たり前のことが、Iターンで来た人たちにとっては、そうではなかったりすることが多々ある。そういうことを率直に言うと反感を買うこともあるが、受け入れてくれることもある。言い方もあろうかと思うが、あまりにいろいろと言いつ過ぎて、失敗した人もいる。(地元)に何もしがらみがない分、言いたいことを言えるが、それでもやはり、地元の人との調和も大切かと思う。それをわきまえたうえで意見を言えば、小さい町なので、自分自身の意見が採用される確率は大きい。実際、私も『えっ？ 私の意見でいいの?』と思ったことはある。それでも、田舎の人は、新しいものを取り入れるのには慎重だと思う。『どうしてそうしなきゃいけないのか?』『今のままでいいじゃないか?』という意見が大半なのだろう」。

従来の秩序体系に、新規の様式や価値観を持ち込むと、共有されてきた態度や行動の型が変形したり変質したりするので、反発や抵抗を受けることになる(河原・杉万, 2003; 森, 1997)。bは、革新(innovation)を表明し伝える際、従来の秩序体系の常識を理解しようと努め、新しい考えを地元の常識と調和

するように調整し導入することで、意思決定の場で居場所を確保していった。CAクラブ事務局長という位置づけは、こうしてbがT町の人間関係に適応した結果を表している。

T町のCAクラブは、毎年、競技大会を開催しているが、bは資料作りから役場との折衝、海外選手とのやりとりなどを1人でこなしている。

「やりがいはあるが、深夜まで残業することもあり、かなりのハード・ワークである。それでも続けているのは、新しい人のつながりが全国に、また、世界にできて、人生が広がった気がするからである。そして、好きな英語が使える仕事であり、町おこしの一環に携われるという喜びがある」。

T町のCAクラブを中核とする人のつながりは、国内外に拡大している。その中心で活動しているのは、T町に移住してきた余所者であることが興味深い。

居場所の確保 T町の気候風土や生活観、生活様式、人間関係などにどうしてもなじめず、しばらく暮らした後、再び別の土地へ移ることを選択した移住者もいる。aによると、「この10年間、他地域から(T町の)空家などへ転居された方が12件あまりあったらしいが、今現在、その約半数がT町を去っている。冬が想像以上の寒さだった、地域環境になじめなかった、祭りに関わるためにT町に来たのではない、祭りの出役は大変迷惑であったなどが、(T町から)転出した理由だと聞く」。

限られた人たちとの人間関係は、大きな変化がなく安定しているので安心や信頼を感じられる反面、僅かな逸脱に対しても敏感に反応する窮屈さを伴う。bによると、「都会だとマンションでは、隣に住んでいる人も知らないような生活であるが、田舎は、誰が何をしたかがすぐわかるし、噂はすぐに広まり、大変な目に会うこともある。それを覚悟するのも田舎暮らしの必須条件かもしれない」。

こうしたことから、移住者が地域生活環境に円滑に適応できるようにと、地元の人たちが、事前に移住計画の説明を求め検討する機会を設けているところもある。熊本県小国町北里地区では、移住者が積極的に地域と交流し、固有の役割を担う決意であることを確認するため、育才舎という30~40歳代の会社員、公務員、自営業者などで構成されるコミュニティ・プランニング・チームが、移住希望者に対して移住前の地ならしを行っている(岡田・河原, 1997)。行政は移住者を選択してはいないというが、地元住民のなかには、来たい人より来てもらいたい人を選択するという思いがあるのかもしれない。

地元の人にとって、外部参入者は余所者である。余所者を仲間として迎え入れることに、地元住民は慎重である。bは、T町では自身が余所者であることを次のように実感したという。

「地元の人にとって都会から来た人は、いわゆる余所者。その余所者が、本気でここに住んでくれるのかを確かめる場所が酒の席。私たちもよく『骨を埋める覚悟で来てくれたんだよな?』と言われた。そこまで真剣に考えていなかった(実際、気に入らなかつたらいつでも出て行く覚悟でいた)ので、『はあ』という感じだった」。

T町では、仲間であることを絶えず確認し合うため、さまざまなきっかけがある。b夫婦も地元の人たちとつき合うことを求められている。

「田舎暮らしで大変なのは、つき合いではないかと思う。つき合いと一言で言ってもいろいろある。祭りだけでも私の住んでいる地区は、地元の神社、地区の神社、そして有名な祭りと3つもある。消防団も田舎特有の組織で、主人も39歳まで務めた。私も婦人消防団に入っていた。小学校の運動会は家族総出となる。出場選手も婦人会や敬老会の人も交えて、さながら地区の大運動会となる。そ

れだけ地域のつながりが濃いということだろう。都会から来た私たちにはとても新鮮な運動会だった。こういった集まりのたびに、酒の席となる。主人もずいぶん鍛えられた。でも、飲みニケーションも大事なつき合いの1つ。お酒の飲めない人には田舎暮らしは苦痛かもしれない。つき合いが苦手という人は、田舎暮らしは大変かもしれない」。

ともあれ、T町に移住して一定期間を経た a と b が、今でも住み続けているのは、T町の地域生活環境を構成する部分として、自己を認知しようとする態度と行動を保持しているからと思われる。環境との間には、ときに緊張する相互作用もみられるが、a、b共に、生活の均衡と調和を実現しているようである。

「最近、どうしてT町に来たのだらうと不思議に思うことがある。縁もゆかりもない土地にいきなり来たわけで、どこかで何かがつながっているのかなと運命的なものも感じる。私はT町に来て、後悔はしていない。むしろ、こんなに私の人生を面白くしてくれたことに感謝している。いろんな条件やタイミングもあったのだろうが、この町に住めてよかったと思う」という b のことばから、あるがままでいられる居場所を移住地によりやく確保した余裕が感じられる。

註

- (1) 山本 (1989) によると、環境心理学や建築学では、社会学が地域生活の研究領域に必ずしも含めない自然環境を取り入れ、地域生活者の満足感、幸福感、生活の質、精神健康などを論議する。
- (2) 生活諸資源には、①物財やサービス財などの物的・経済的資源、②威信や権利などの社会的・関係的資源、③是認や愛情などの心理的・関係的資源、④知識や技能などの文化的・情動的資源がある (山本, 1989, p. 69)。
- (3) 生活諸関係には、①親子関係や夫婦関係など、社会的ネットワークへの参加を意味する他の生活主体との制度的な社会関係、②恋愛や友情など、個人的ネットワークへの参加を意味する他の生活主体との非制度的・個人的関係、③職場の組織や地域集団や自発的結社など、組織や集団などの集

合全体、④企業や行政や地域社会の物財、サービスなどの提供主体との外的・社会関係がある (山本, 1989, p. 69)。

引用文献

- Bengtson, V.L. 1975 Generation and family effects in value socialization. *American Sociological Review*, **40**, 358-371.
- Elder, G.H. Jr. 1974 *Children of the great depression: Social change in life experience*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. Madison: International Universities Press. (西平直・中島由恵 訳 2011 『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房)
- 広田すみれ 2003 「農村居住高齢者のコミュニケーション・ネットワークの分析」『社会心理学研究』**19 (2)**, 104-115.
- 河原利和・杉万俊夫 2003 「過疎地域における住民自治システムの創造—鳥取県智頭町「ゼロ分のイチ村おこし運動」に関する住民意識調査—」『実験社会心理学研究』**42 (1)**, 101-119.
- Kahn, R., & Antonucci, T. 1980 Convoys over the life course: Attachments, roles, and social support. In P. Baltes & O. Brim (Eds.) *Life-span development and behavior* (Vol. 3). New York: Academic Press.
- Hareven, T.K., & Langenbach, R. 1978 *Amoskeag: Life and work in an American factory-city*. New York: Pantheon Books.
- Levinson, D.J., et al. 1978 *The seasons of a man's life*. New York: Knopf. (南博 訳 1980 『人生の四季—中年をいかに生きるか—』講談社)
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science*. New York: Harper & Brothers.
- 森永壽 1997 「過疎地域活性化における規範形成プロセス—鳥取県八頭郡智頭町の活性化運動13年—」『実験社会心理学研究』**37 (2)**, 250-264.
- 岡田憲夫・河原利和 1997 「交流時代における中山間地域の外部者参入過程に関する実証的研究—ハビタント概念の例証—」『実験社会心理学研究』**37 (2)**, 223-249.
- Orford, J. 1992 *Community psychology: Theory and practice*. New York: John Wiley & Sons. (山本和郎 監訳 1997 『コミュニティ心理学—理論と実践—』ミネルヴァ書房)
- Plath, D.W. 1980 *Long engagements: Maturity in modern Japan*. California: Stanford University Press.
- Schlossberg, N.K. 1989 *Overwhelmed: Coping with life's ups and downs*. New York: Lexington Books. (武田圭太・立野了嗣 監訳 2000 『「選職社会」転機を